

林家の危機

— 林鶯峰と息子梅洞 —

林家は初代羅山以後、十二代の学齋に至るまで、江戸幕府において教育学問を統轄する御儒者の家として大きな存在感を示してきた。徳川家康に召し抱えられた初代羅山によって林家は草創され、二代目鶯峰・三代目鳳岡がその跡を承けて守成の役割を担い、特に元禄四年（一六九一）三代目鳳岡の時に、聖堂と林家の塾が上野から湯島の地へ移転されて、林家の塾は昌平塾と呼ばれるようになり、さらに同じ年に鳳岡が幕府から大学頭に任ぜられたことによって、林家の地位は確立されたといつてよいでしょう。

しかし、そこに至る迄の林家の歩みは必ずしも平坦なものではなく、少なからざる波瀾もありました。そうした波瀾のなかの一つに、二代鶯峰の長男で、三代鳳岡の兄であった林梅洞の夭折ということがあります。本日はその梅洞の死の前後に起こった出来事を取り上げて、幕府の御儒者林家とはどのようにして確立されたのかというところをご紹介しますと思います。

林家二代の鶯峰は初代羅山の三男でしたが、二人の兄が若くして

揖 斐 高

亡くなったため、六歳年少の弟読耕齋と共に父羅山を助けて儒者として幕府に出仕し、明暦三年（一六五七）四十歳で羅山の跡を承けて林家の家督を継ぎました。二代鶯峰は初代羅山をどのような存在として見ていたか。まず、鶯峰の書いた「碩果林記」（鶯峰林学士文集）巻三）という文章を紹介します。

応仁より以来、朝廷式微し、儒礼悉く廢す。文字の業、僅かに禅徒の手に入る。痛きかな、悲しいかな。此時に当たりて則ち未だ絶へざるもの殆ど絶へ、未だ燼えざるもの殆ど燼えて、我が道（儒学の道）極まりぬ。偶々藤斂夫先生（藤原惺窩）の秀出せる有りて、絶へんと欲するの線（せん）を継ぎ、燼えんと欲するの燈を挑（か）けて道脈接統し、文学稍々（やや）顕る。亦た是れ儒林の碩果（大きな木の実）なり。吾が先君子（羅山を指す）を得るに及んで、これを講習し、これを討論して、道德粲然、文章煥乎（か）たり。枯楊、穉（こ）木（木の切り株から生えた芽）を生じ、藝園、花を開く。是に於いて氣を逐ひ、芳を尋ね、笈を負ひ（遊学する）、酒を載せて（ものを問（こ）いに來る）、学業有ることを知るなり。斂夫即世するに及んで、先君子、天下儒林の宗と為りて、幕府

の侍読と為る。東舟（羅山の弟）は同根の幹為り。敬吉（羅山の長男）秀でて実り、門葉藜藜として鶯は春樹に吟じ、虫は秋叢に鳴く。英華繁榮、我が林家より盛んなるは無し。闔国（国じゅう）、その庇蔭に依り、その下風に立つ。

鶯峰は父羅山の存在を、衰亡の危機にあった儒学を藤原惺窩の後を承けて復興し、江戸幕府に仕える儒者として社会的にも大きな影響力を発揮したとし、その羅山のお蔭で林家一門の現在の繁栄もたらされたと述べているのです。

そして、父羅山の学者としての偉大さについて、鶯峰は「羅山先生集序」（『鶯峰林文学士文集』巻八十二）において、次のように評しています。

余が先考羅山林先生は敏捷絶倫、博学世に冠たり。……先生、斯の道を以て己が任と為してこれを發揮し、愈々これを揚推す（評論する）。世を挙げて皆な謂へらく、儒宗・文豪・詩傑悉く皆な一人に備はれりと。亦た難からずや。恭しく惟れば、それ先生の学は経を以て主と為し、程朱の書を以て輔翼と為して、諸を歴史に攷へ、諸子類に参へ、百家を網羅し、今古を取拾して我が国史に該通し、乃し（さらに）裨官小説に至るまで見ずといふこと無し。

羅山の学者としての特徴は「博学」「敏捷」という点にあると鶯峰は指摘しています。そして、それは父羅山の日常生活における超人的な努力に基づくものであったことを、鶯峰は「西風淚露」（『鶯峰林文学士文集』巻七十八）において次のように述べています。

先考、家事を以て先妣に附し、起居坐臥、唯だ書を読むのみ。……書を読むに、紙葉を計らず、唯だ或いは寸、或いは冊を以て限りと為す。若し一睡して醒むる時は、則ち五更鷄鳴と雖も、乃ち起きて巻を開く。少きより老に至るまで此の如し。故に一年の間、加ふる所の朱句或いは百余冊、或いは二百冊、此等の勤め、皆な及ばざる所なり。

「先考」は亡父、「先妣」は亡母。父羅山は家事一切を母に任せてひたすら読書に没頭し、読書量は頁数で計算するのではなく、本の厚さや冊数で計算するほどであったということです。

父羅山の死後林家の家督を継いだ二代目鶯峰は、このような非凡で努力家の父羅山が一代で築かれた幕府御儒者としての林家を存続発展させることが、自らに課せられた使命だと強く自覚するようになりました。鶯峰は父羅山がまだ生きていた寛永十七年（一六四〇）、羅山五十八歳・鶯峰二十三歳）に、羅山から『五経大全』（明の永楽帝の命により編纂された五経の注釈書）を与えられ、五経（詩経・書経・易経・春秋・礼記）の講筵を開くことを命ぜられました。父羅山としては鶯峰を一人前の儒者にするための教育の一環だったものと思われませんが、鶯峰は父の命に従って『詩経』から開始し、二十三年後の寛文三年（一六六三）に『易経』の講義を終えて、五経全ての講義を完了しました。父羅山の後継者たらんとして努力した結果がここには表れていますが、幕府は二十三年に及ぶこうした鶯峰の労を賞して「弘文院」の称号を与えました。「弘文院」の称号は、中国唐代に置かれた役所「弘文館」に基づく名称ですが、

「弘文館」は書籍を収蔵管理し、学士を置いて儒学教育をする所であった。林家は羅山以来剃髮・法体して幕府に仕え、鷺峰も僧官である法印に叙せられていました。つまり、林家は羅山の中から儒者でありながら僧侶としての待遇で幕府に仕えていたのですが、こうして「弘文院」という儒者としての称号を幕府から与えられたということは、儒者としての立場を幕府から改めて認められたことになるわけで、林家にとっては大きな意味を持つものになりました。

鷺峰は幕府の御儒者であることが林家の「家業」であると強く意識するようになり、日々の生活においても「家業」に努めることが自分に課せられた役割であることを、次のように述べています。ご紹介するのは、鷺峰が五十一歳の寛文八年（一六六八）に書いた「休日漫筆」（『鷺峰林学士文集』巻百十五）という文章の中の一節です。

公なるべきときは則ち公、私なるべきときは則ち私、公事は緩くすべからざるなり。私事は意に任すべけんか。意に任するときは則ち較や懈り、懈るときは則ち遂げず。遂げざるときは則ち廢す。然るときは則ち私事と雖も、日を限り時を刻みてこれを成すときは、則ち自づからその効を見ん。余常に私事を以て公事に准じて怠慢せず。故に勤めに就くの日多く、休日は少なしと雖も、私の為す所も亦た日を積みて成る。

鷺峰は幕府の御儒者として公務優先の日々を過ごし、私事に対しても公務に準じて勤勉であることで、林家の家業を子孫に伝えていくこととしていたことが分かります。

「家業」を子々孫々に伝えていくことに大きな意味を見出していた林家二代の鷺峰には二人の男子がありました。鷺峰の長男として寛永二十年（一六四三）に生まれた梅洞と、翌年の正保元年（一六四四）に生まれた一歳違いの二男鳳岡です。鷺峰は二人の息子に林家の将来を託そうとしましたが、長男でもあり、また性格・学才ともに秀でた梅洞に大きな期待がかけられました。そして、生前の羅山も、初孫として生まれた梅洞の聡明さを喜んで、自ら英才教育を施しました（『西風淚露』巻七）。

先考（羅山を指す）天正十一年癸未八月を以て生まる。六十一年を歴て汝（梅洞を指す）寛永二十年癸未八月を以て生まる。先考初めて孫を得、特にその干支を同じうすることを喜ぶ。生まれて三日にして先考その幼名又三郎を以て之に名づく。七、八歳に及びてその幼年に誦する所の論語を以て之に授け、口づからその句讀を教ゆ。而して五経の古本、次を逐ひて以て授け、以て教へ、而して後に左伝・文選・蘇黄集（蘇賦と黄庭堅の詩集）を口授し、而して後に三史（史記・漢書・後漢書）を与へ、その朱句を写さしむ。詩を作るときは則ち之を和す。且つ喜びて曰く、「彼、我に似たり。我、孫有り。その口授面命（対面して教えること）、諸子と雖も此の如くならず。況んや諸孫に於いてをや」。

長ずるに及んでますます頭角を現わすようになった梅洞の人となり、林家の門人で梅洞の六歳年長の友人であった幕府御儒者人見竹洞は、その「梅洞林先生全集序」において次のように褒め讃えて

います。

君生まれて骨秀聡悟、長じて神奇該博、夙に三墳五典（中国古代の書物）の義を弁じ、粗ば百家諸子の言に通ず。聞く者は以て神童と為し、観る者は以て偉器と為す。雞林の信使（朝鮮通信使）、犀角（貴人の人相）の豊盈・翰苑の洪業（学問の世界における大きな仕事）は鳳毛（子が父よりも優れていること）の美質を彰かにすと称す。その為人や、温かきこと春風の如く、果らかなること冬日の如く、清らかなること氷壺の如く、肅かなること玉山の如し。家に居りては孝弟有り。人に接しては仁愛有り。上を奉ずるの誠、百鍊を寸丹に尽し、日を惜しむの勤、分陰を尺璧に競ふ。是に於いて負笈の生、自づから桃李の蹊を成し、侍席の徒、足を芝蘭の室に入るを得たり。故に學術日々に興り、教育月々に盛んなり。人皆なその徳を仰ぎ、その化を懐ひて謂ふ、郁郁たる文彩、日東の四道（日本全国）を該み、煌煌たる徳輝、斗南の一人（北斗星以南にただ一人、天下第一等の人）に類す、固に是れ希世の傑なりと。

いささか褒めすぎの感が無くはありませんが、梅洞の人となりの優れていたことと、秀才の秀でていたことが指摘されています。いつぼう、一歳違いの弟鳳岡については、鳳岡の息子で林家四代目を継いだ榴岡が、鳳岡没後に記した「朝散大夫内史鳳岡先生林府君行状」（『鳳岡林先生全集』）という文章の中で、次のように述べています。

初め春信（梅洞）は聡敏絶倫、名は一時を傾く。府君（亡父

の意、鳳岡を指す）は終日謙遜して駭者（愚か者）の如く然り。蓋しその声聞、家兄に差ることを欲せざればなり。

梅洞の生前、弟鳳岡は兄梅洞と是对照的に、いつも謙遜している愚鈍な人間に見えたが、それは鳳岡が弟として兄梅洞を越える評価を得ないよう遠慮していたからであろうというのです。兄梅洞在世中の弟鳳岡は、周囲からは兄と比べればすべてに劣っていたバツとしない存在であったことがわかります。こうした梅洞・鳳岡兄弟に対する父鶯峰の評価も、周囲の見るところと同じでした。鶯峰が父羅山の親友だった京都の詩仙堂の主石川丈山に宛てた、承応三年（一六五四）の書簡「石丈山に寄す」（『鶯峰林学士文集』巻二十八）の中に、次のような文章があります。この年、梅洞は十二歳です。

余、東に來たりて既に二十年、その間偶々兒童の頗る穎悟なる者を見るに、僅かに字を写し巻を披くこと有るときは則ちその親朋これを自負し、これを誇説す。その成長に及ぶときは則ち多くは是れ庸人なり。今、渠（梅洞を指す）未だ舞勺の年に及ばずと雖も、然るに雕虫篆刻の戯を為さずして、箕裘を為し裘を為すの志有り。嗚呼、膝上の愛、誰かこれ無からんや。誉兒の癖、これを慎まさんばあるべからず。故に渠が名、未だ昔て謾りに人に説かず。

「舞勺の年」は、十三歳。「雕虫篆刻」は、文章の字句を細かく飾ること。「箕裘」は、先祖伝来の業。「膝上の愛」は、我が子への愛情。この文章には、聡明な我が子梅洞を誇りにし、林家の跡継ぎとし

て期待をかける父鷺峰の思いが吐露されていますが、この書簡の中で父鷺峰が一歳下の弟鳳岡には触れることはありません。また、梅洞の生前に書かれた父鷺峰の文章には、弟鳳岡の才能を称揚するようなものはありません。父鷺峰は長男梅洞の器量を高く評価し、梅洞に家督を譲り渡せば林家の将来は安泰だと考えていたようです。

二

林家二代目鷺峰が幕府御儒者として取り組んだのもっとも大きな仕事は、神代から江戸時代初期の慶長年間に至る編年体日本通史である『本朝通鑑』の完成でした。これはもともと初代羅山が幕府の命を受けて『本朝編年録』という書名で編集に着手したものでしたが、羅山の死によって平安時代の宇多天皇までで中絶していました。鷺峰はその後をついでこれを完成させようと発起し、幕府に働きかけて編集事業を再開させることになりました。鷺峰が編集の総裁となり、書名も『本朝通鑑』と改めて作業が開始されたのは鷺峰四十七歳の寛文四年（一六六四）十一月のことでした。

鷺峰は林家が幕府から賜った別邸地である上野忍岡に新たに国史館を建てて編集作業の場としました。その編集体制について、鷺峰は寛文四年十一月一日に書いた「国史館の記」（『鷺峰林学士文集』卷三）に次のように記しています。

臣が別墅忍岡に先聖殿を崇すを以て、故らに伎を相し地を画し、南に向かひ西に並びて、新たに長寮十五歩を営み、以て編修の場と為す。官吏松信重（松平信重、小普請奉行）等これ

を監す。臣をして二男・門人・書生・筆吏三十余輩を率いて、以てこれを総裁せしむ。各々月俸・日支を賜ふ。且つ蔵書庫を建てて以て旧記を聚め、庖厨を造りて以て飲食を設く。

もう少し具体的にいうと、鷺峰は編集作業に専心するため家族と別居して神田の本邸から上野忍岡に生活の場を移しました。そして、新築された国史館では編集総裁鷺峰のもとに四人の撰者が置かれ、草稿の執筆に当たりました。鷺峰の長男梅洞二十二歳、羅山の門人で幕府儒者の人見竹洞二十八歳、羅山の門人で幕府評定所に出仕していた坂井伯元（年齢未詳）、鷺峰の次男鳳岡二十一歳の四人がその撰者です。草稿執筆の分担は、昌泰期〜久寿期（八九八〜一五五）は梅洞、保元期〜文保期（一一五六〜一三一八）は竹洞、元応期〜正長期（一二一九〜一四二八）は伯元、永享期〜慶長期（一四二九〜一六一一）は鳳岡ということになり、全体を鷺峰が点検調整しました。これら四人の草稿執筆者の下に諸生・侍史・筆吏と呼ばれる編集員が配され、さらに十四人の備書（筆写係）が置かれ、彼らには幕府からの俸給が支給されました。ほぼ三十人余の体制で編集作業は始まったわけです。

『本朝通鑑』の編集再開を決定した幕閣内部においても、歴史編集の意義が必ずしも理解されていたとはいえず、また歴史編集のためには不可欠ともいうべき史料収集も周囲の無理解から捗らず、さらに世間からは歴史編集など無用の長物だと嘲笑されるなど、国史館での『本朝通鑑』の編集作業は逆風にさらされました。しかし、編集総裁として鷺峰は退路を断ち、一命を賭して、編集作業に邁進

しました。国史館での『本朝通鑑』の編集作業が漢文体の日記形式で克明に記録されたものが残されています。それが『国史館日録』と呼ばれるものですが、それには編集作業の具体的な進捗状況や、その時々々の驚峰の思い、そして『本朝通鑑』の編集に関わる人々の人物評価が率直に記されています。例えば編集作業に取りかかってから四ヶ月後の寛文五年（一六六五）三月二十日に次のような記事があります。

正月八日より今日に至りて七十余日、休日を除くの外、一日も怠らざるなり。然るに編集は望洋として測るべからず。小を積み大を成すの志に非ざれば、則ち何ぞ成功すべけんや。癖を勉めよ。

新年の仕事始めは一月八日、国史館の休日は月に五日、休日以外の日は午前八時から午後四時までが勤務時間と定められていました。規則正しく日々倦むこと無く勤勉に編集作業に取り組んでいても、なかなか先は見えないと嘆き、しかし、日々勤勉に編集作業を積み重ねていく以外に、完成に至ることはできないのだと己を叱咤激励しているわけです。

さらにこれから二年近くが経った寛文七年五月八日、驚峰は次のように記しています。

余、初めて此事を奉ずるの時、既に元老に対して、史館を以て戦場に比す。今、不幸にして一身に此かの楽しみも無し。

又た一願も無し。唯だ生死を以て斯文に繋ぐるのみ。成ると成らざると、則ち毫を握り几案の間に斃るるは我が素志なり。実

に是れ死戦の場なり。

『本朝通鑑』の編集所である国史館は、自分にとつては死を賭した戦場だという悲壮な決意を、驚峰は自らに言い聞かせるかのよう書き留めているわけです。

こうした「死戦の場」国史館で奮闘する驚峰をもっともよく支えたのが、『本朝通鑑』撰者の一人でもあった長男梅洞でした。梅洞没後、驚峰が梅洞の死を哀惜して著した『西風涙露』の巻下において、国史館で梅洞が果たした役割を次のように記しています。

方に今、余が門下及び館中の諸徒、相睦みて交はり悪しからず。想ふに夫れ汝（梅洞を指す）能く導き、能く交はるが故か。抑も又た汝が人と為りを見て、慙ちて然らざるか。汝自ら謙遜して人を侮らず。黽勉して人に輸けず。言行相顧みて多言ならず、妄戯せず。故に人の為に軽んぜられずして、衆の為に好みせらるるなり。人の長ずる所を長として以て相妒まず、人の短なる所を短としてこれを教へて黜けず。故に門下は皆な志を同じくし、館中は皆な類を同じくす。未だ口論の出づるを聞かず、悪声の相反すること有らず。

梅洞はその人格的な魅力によって、国史館や林家一門の中に和睦をもたらしたと述べているわけです。

こうした国史館での『本朝通鑑』の編集と、林家の学塾での門人教育とは本来的には別々のものでした。しかし、国史館と林家の塾とが同じ上野忍岡の林家の別邸地の中にあり、また林家の門人たちが

の多くは『本朝通鑑』の編集に携わっていましたが、『本朝通鑑』の編集と門人教育とは実際は重なり合うことになりました。そして現実的な問題としては、なかなか捗らない『本朝通鑑』の編集を完成に向けて加速するためには、林家の門人たちの学力向上が必須の課題になってきていました。『本朝通鑑』の編集員を取りまとめ、編集総裁である父鷺峰を支え、いずれ父鷺峰の跡を継いで林家の三代目当主になることを自覚していた梅洞は、林家塾の教育体制を現状に適合させるためにはどう改革すべきかということを考えるようになりました。そして、その結果として、『本朝通鑑』の編集開始から一年半余り後の寛文六年（一六六六）四月に、梅洞は林家の家塾に「五科十等」の制を設けることを父鷺峰に進言しました。

この「五科十等」制の制定について、鷺峰は『西風涙露』の中で次のように述べています。

今夏、余、汝が固く請ふに因つて、私に経・史・文・詩・倭学の五科を設け、十品を分かち、甲より癸に至る。各々その才を量りてこれが次第を為す。且つ四員長を置いて、以てこれが教授と為す。汝、員長と為りて以てこれを指揮するに、親疎の私わたくし有らず。是において此地三十余年を経て、祭儀・教化共に成りて、初めて真の学校と為る。皆な是れ汝が挙する所なり。謂いひつべし、能く乃祖なほ（羅山を指す）の志を継ぎ、余が事業を成す者なりと。

梅洞の進言した「五科十等」の制を定めたことによって、林家の家塾は初めて学校としての体裁を整えたと言っていますが、この

「五科十等」制の具体的な規定は、鷺峰の寛文六年四月二十四日付けの「忍岡家塾規式」（『鷺峰林学詩文集』巻五十一）という文章に残されています。これを説明すると、次のようになります。「五科」とは経科・史科・文科・詩科・倭学科の五科目をいい、「十等」とは十干を名目とする甲等から癸等までの十等級をいう。さらにこの「十等」は、上等（甲等・乙等・丙等）、中等（丁等・戊等・己等）、下等（庚等・辛等・壬等・癸等）という三段階に区分けされていました。

「五科十等」における等級の進級は、次のように定められました。経科・史科・倭学科の三科目については、試験をして、その結果によって一等を進めるとされています。残りの文科と詩科については、詳しくは煩雑になるので省略しますが、佳作や優秀な作品をどれだけ作ったか、その数によって等級の進級が定められました。

そして、塾生の待遇・呼称も「五科十等」の制に基づいて決められ、五科いずれも甲等に昇った者には「大員長」の称号が与えられ、「大員長」の下に「左員長」「右員長」「権左員長」「権右員長」という四員長が置かれました。これら四員長になれるのは、「員長」の下に置かれた「員実生」中の傑出している者で、以下の四件の仕事をこなすことができる者から選ばれました。四件の第一は、塾生の要望に応じて講義することができること。第二は、塾生からの質問に正しく答えることができること。第三は、塾生の詩文の草稿を訂正できること。第四は、塾生の五科の進歩を試験して公平に進級を推奨できることでした。

こうした四員長の下に置かれたのが「員実生」です。「員実生」は、経科・史科・文科・詩科の中等にいて、その中でいずれの科においても一等級進めることができた者が充てられました。この「員実生」より下位というわけではありませんが、限定された得意科目の評価によって「員特生」と「員秀生」とが置かれました。「員特生」は、経科の学力は上等に至っているものの、他の科目が得意ではない者に与えられる称号です。また、歴史科あるいは倭学科の学力が上等に至っている者も、この「員特生」に准ずることができました。「員秀生」は、文科・詩科において中等の者が、両科において一等を進めたときに与えられる称号です。つまり、「員長」や「員実生」が総合的な学力評価によって塾生に与えられる称号であるのに対し、「員特生」や「員秀生」は学力の専門性を評価して与えられる称号であったということになります。塾生の学力評価において、いわゆるジェネラリストとスペシャリストを区別する意識があったということになります。そして、上記の称号の下に「萌生」が置かれ、科目毎に下等にある者が中等に進んだときに、この称号が与えられました。なお、未だ下等に入らない者は「末生」と称されたようです。

当時、林家の塾生は二十余名でしたが、大員長は空席、左員長に梅洞、右員長に人見竹洞、権左員長に坂井伯元、権右員長に鳳岡が宛てられました。これら四員長は『本朝通鑑』の草稿執筆者であり、ここにも『本朝通鑑』編集と連携させた家塾の制度改革であったことが示されています。当初、員長の下に配された員実生・員特生・

員秀生については該当者なしとされており、塾生の学力に対する評価がかなり厳しいものであったことが窺われます。だからこそ家塾の制度改革をして塾生の学力を向上させることが必要だったということかもしれません。

こうした家塾の制度改革を率先したのは梅洞でしたが、その梅洞は「忍岡家塾規式」が定められてからおよそ二ヶ月後の寛文六年（一六六六）八月四日に瘧（マラリア性の熱病）を発病し、その翌月九月一日に二十四歳で病没しました。病中、熱に冒されていた梅洞は「大員長と為らずんば死せず」（『西風涙露』）という諺言を口走ったといえます。家塾改革を率先した梅洞の熱意の大きさを物語っています。

三

『本朝通鑑』編集におけるもつとも頼りになる補佐役であり、また林家塾の制度改革に率先して取り組んだ長男梅洞の予期しない突然の死は、父鷲峰に深刻な傷手をもたらしました。『本朝通鑑』の編集日記として『国史館日録』という克明な漢文体日記がつけられていたことはすでに述べましたが、この『国史館日録』は梅洞が没した九月一日で途切れ、以後四十日間、十月十一日に再開されるまで中断しています。この四十日間は鷲峰が悲しみにくれ喪失感に打ちのめされた期間でした。『日録』が再開された十月十一日の記事は次のように記されています。

十月十一日、春信（梅洞）没後、昨日に至りて四十日、館事

廢す。今日、再挙して事に就く。……凡そ見る所、聞く所、考ふる所、補ふ所、悉く是れ春信の墨痕なり。胸襟鬱陶して言ふべからざるなり。強勉して之を為す。嗚呼、官事鹽ちかきこと無し（公の仕事は大切なもので、力を尽すべきである）。豈に其れこつしご（なござり）ならんや。九月朔より眼は書を見ること能はず、手は筆を執ること能はず。今日初めて硯を吹き、机を掃ぐ云々。

四十日に及ぶ空白期間を経た後、『本朝通鑑』の編集を再開したものの、父鶯峰の梅洞哀悼の思いは、林家の将来に対する不安と重なり合つて、鶯峰の心を強く揺り動かし続けていました。そうしたなかで鶯峰は門人を筆記役にして十月十三日から口述を始め、それは二週間後の十月二十七日まで続きました。鶯峰は憂悶の思いを吐露することによって、おのれ自身の不安定な精神状態をコントロールしようと試みたように思われます。その漢文体の口述筆記が『西風涙露』三巻です。初代羅山以後の林家一門の来し方を振り返り、林家一門の期待の星であった梅洞の夭折を悼み、林家一門の危機的な現状を憂うという、八十七条からなる回想記ともいふべき著作です。その中で、梅洞が没した直後に、自らが陥つた錯乱状態を鶯峰は次のように回想しています。

汝没する時、余の見る所、聞く所、皆な憂ひなり。余が心、狂するが如し。自らおほえ為なり、生きて恥あらんよりは、寧ろ死せるが愈まされりと為すなり。若し頓死せば幸と為すとしなり。……余、家を継ぐこと十年、幸にして所生（父母）を辱め

ざれば則ち足りぬ。今、大麥に遇ひて精神昏冥、言動正しからず。若し長く存せば則ち嘲り有らん。胸中錯乱、思慮定まらず、昼と無く夜と無く、展転反側す。

しかし、この鶯峰の嘆きは、単に夭折した子を思う親としての感情によるものだけではありませんでした。鶯峰は幕府に仕える御備者であることを「家業」として強く意識していたことはすでに述べましたが、鶯峰は親・子・孫と三代続いてこそ「家業」と称することができると考えていました。鶯峰は『西風涙露』巻中に次のように述べています。

古に云ふ、「医は三世ならざれば則ちその業を飲まず」と。豈にそれ医のみならんや。曾て一耆老有り。余に謂ひて曰く、「頼信・頼義・義家相繼いで武名籍甚たり。故に源家繁昌す。

清盛の如きは一世の威を逞しくすと雖も、然も重盛（清盛の長男）は早く薨じて宗盛（清盛の三男、清盛没後家業を率いた）は昏懦こんだなり。故に平家衰へぬ」と。我が家業は先考これを草創し、我と靖（鶯峰の弟読耕齋）とこれを守成す。汝（梅洞を指す）に至りて則ち三世相続く。今何ぞ不幸にして此に至る。

初代羅山の草創を継いだ自分を経て、梅洞が三代目を受け継ぐことで、林家の「家業」が確立されると鶯峰は期待していました。そして、その期待に応えるだけの器量を梅洞は具えていました。そのような梅洞の突然の死は、子を失った親としての哀しみの感情に止まることなく、林家の危機ということを強く鶯峰に意識させたのです。梅洞の死後、鶯峰の常軌を逸した悲嘆のありさまを心配した友

人に対し、鶯峰は次のように答えたという『西風淚露』の記事からそれを窺うことができます。

今憂ふる所は昔に天性の愛のみに匪ず。家業の衰へを憂へてなり。家業の衰へを憂ふるは忠孝を忘れざるが故なり。愁（梅洞の名）存するときは則ち家業全くして忠孝成るべく、愁没するときは則ち家業危うくして忠孝闕く。余に愁有るは猶ほ武夫の弓矢を持つるがごとし。弓矢已に失ふ。憑む所無し。卿（なんじ）それ察せよ。

今の自分の常軌を逸した悲嘆は、子を失った親の恩愛の情によるものだけではない。期待の星であった息子梅洞は自分にとつては武士における弓矢のような存在だった。弓矢という武器無くして武士は闘うことはできない。頼りとすべき武器であった梅洞の死は、林家に危機的な状況をもたらすものにはかならない。そのことを自分は憂え悶えているのだと鶯峰は答えたのです。

しかし、時の経過とともに長男梅洞の死をようやく受け入れられるようになった鶯峰は、必然的に次男鳳岡に「守成」すなわち「家業」確立への期待をかけるようになりました。現実問題として、兄の陰に隠れて愚鈍に見えていた次男鳳岡以外に、林家の将来を背負う人材はいませんでした。梅洞没後十ヶ月近く経った寛文七年（一六六七）七月一日の『国史館日録』に、次のような記事があります。

嗚呼、信（春信すなわち梅洞）や惜しむべし。自ら惜しむのみに非ず、世の為、人の為にも亦た惜しむ。常（春常すなわち鳳岡）や頗る勤学の志有り。然るに今多病なり。その快復して

箕裘（父の業を継ぐこと）を辱めざるを待つのみ。

こうして兄梅洞没後、父鶯峰および一門の期待を背負うようになった弟鳳岡の気持には複雑なものがあつたようです。兄梅洞没後ほどなくして詠んだと思われる鳳岡の詩があります。

感懷三首（鳳岡林先生全集）巻四十四）うち一首

師兄永訣欲憑誰 誰をか憑らんと欲す

家業何教微力支 家業 何ぞ微力をして支え教めん

憂鬱满腔推不去 憂鬱 腔に満ちて 推せども去らず

枉随世態強開眉 枉げて世態に随ひ強いて眉を開く

兄梅洞の突然の死によって、林家の家業を承継ぐ立場になつてしまつたが、自らの微力を自覚する鳳岡にとつて、憂鬱な気分は体中に満ちてどうしても消し去ることができない。しかし、世間の目を意識して無理にでも深刻な表情にならないよう笑いを見せているというのです。自分に林家の幕府御儒者としての家業を継ぐだけの能力があるのかどうか、自信の持てない鳳岡は「憂鬱」な気分にとられていたのです。

しかし、父鶯峰および一門の期待に応えようと決意した鳳岡は、兄梅洞在世中とはうって変わって一転して積極的な姿勢を見せ始めるようになりました。家塾での経書の講読や漢詩文の創作にも意欲的に取り組むようになったほか、国史館での『本朝通鑑』の編集作業においても、梅洞に代わって父鶯峰の補佐役を積極的に行なうようになりまし。梅洞没後三年の寛文九年（一六六九）十二月二十六日に書かれた「男戀（鳳岡のこと）に示す」（『鶯峰林学士文集』）

卷四十」という文章において、鶯峰は男鳳岡に対してなおいっそうの努力をするよう期待しています。

我、今、唯だ一子のみ。その平生頤養いよちやう（育て養う）して病無からんことを欲す。然も家業は汝（鳳岡を指す）に非ざれば則ち附随す可き方無し。今、汝、病無くして健やかなり。讀書の勤めも亦た懈らず。我喜びて寝ねず。猶ほ期す、勤むることの熟して労を忘るるの境に到り、漸漸として次を逐ひて先考（羅山のこと）の化（教化・徳化）に企て及ばんことを。

梅洞没後あらたな体制で臨んだ『本朝通鑑』の編集は、梅洞が没して四年後の寛文十年（一六七〇）に完成し將軍に献上されました。その恩賞として編集総裁の鶯峰は家禄二百石の加増を受け、鳳岡以下編集に関わった林家一門にもそれぞれ恩賞が下賜され、『本朝通鑑』の編集費用として支給されていた九十五人扶持は、以後林家の家塾運営費用としてあらためて林家に下されることになりました。長男梅洞の突然の死は林家にとっては大きな危機でした。しかし、『本朝通鑑』完成のために鶯峰と次男鳳岡そして一門の門人たちが持てる能力を結集することによって、林家はその危機を脱し、御儒者としての林家の体制を固めていったと言つてよいでしょう。

『本朝通鑑』完成後十年の延宝八年（一六八〇）、林家二代の鶯峰は六十三歳で没し、鳳岡が三十七歳で家督を継ぎ林家三代となりました。五代將軍徳川綱吉に寵用されるようになった鳳岡は四十八歳の元禄四年（一六九一）に幕府の命で聖堂と家塾を上野忍岡から湯

島に拡充・移転させ、同時に新たに大学頭という官職に任ぜられ蓄髪を命ぜられました。それまで林家の当主は法印という僧官に任ぜられ、剃髪法体して幕府に仕えていました。すなわち表向き林家は僧侶としての待遇で幕府に仕えていたわけです。古代の律令制のもとでは朝廷の学問を管掌する官職は大学頭でしたが、室町幕府以来、幕府の学問は僧侶が司ることになっていたので、江戸幕府もこれを踏襲していました。しかし、林家は三代鳳岡の時に初めて大学頭という儒者に相応しい官職を、江戸幕府の組織の中で正式に得たのです。幕府に儒者として仕える林家の「家業」の「守成」は、ここでようやく果されたと言つてよいでしょう。初代林羅山が徳川家康に仕えるようになってから実に八十五年後のことでした。

〔付記〕 本稿は平成二十六年十一月二日（日）に新宿歴史博物館でおこなわれた公開講座「江戸の朱子学」第一回の講演録である。

（いび・たかし 本学特任教授）